

平成 28 年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

小学校教育における郷土愛の醸成

～地域の特色にあわせた取組～

調査地：マレーシア クアラルンプール市

インドネシア バリ島 ウブド村

調査日：平成 28 年 9 月 21 日、24 日

平成 29 年 2 月

一般財団法人 地域活性化センター

総務企画部 クリエイティブ事業室 大脇 瑤子

目 次

1	はじめに.....	1
2	マレーシア クアラルンプール市内小学校の教育.....	1
	（1）クアラルンプール市の概要.....	1
	（2）小学校の取組.....	2
	（3）多民族・多文化ならではの教育のあり方.....	5
3	インドネシア共和国 バリ島 ウブド郡ウブド村内小学校の教育.....	6
	（1）ウブド村の概要.....	6
	（2）小学校の取組.....	7
	（3）伝統文化をとり入れた教育のあり方.....	8
4	日本における地域を学ぶ教育.....	9
	（1）日本の教育.....	9
	（2）粕江市の取組.....	10
5	3ヵ国の教育を比較して.....	11

1 はじめに

日本全体の人口減少が進む中で、東京都の人口も2020年をピークに減少に転じることが想定されている。私の出向元である狛江市の人口は、2017年1月1日現在80,807人となっているが、狛江市における合計特殊出生率1.02（2006年～2010年までの5年間の平均値）は、ほぼ一貫して全国水準、都水準を下回って推移しており、年少人口は30年前と比較すると半数程度に減少している。社会増による人口増を見込むことは難しく、現状の低い出生率で推移した場合、自然増減もマイナスになると予測されている。

こうした人口減少の中でこそ、子ども一人一人を大切に、豊かな人間性と多様な個性を育むことで、成人となった後も市内だけでなく市外からも狛江市に対して関わりを持ちたいと思えるよう、郷土愛を養っていくことが重要と考える。郷土愛の醸成には、子どもの頃の地域での過ごし方が重要であり、中でも一日の大半を過ごす学校での教育内容が最も影響を与えやすいのではないだろうか。そういった点から、今回の地域づくり海外調査研究事業の調査にあたっては、次の2つの観点から、学校教育における郷土愛を育む取組について考察することとした。

1つ目は、多様性を認め合える教育の観点として、マレーシアのクアラルンプール市を視察先とした。マレーシアは、マレー人、華人（中国系）、インド系とその他少数民族などで構成される複合社会であり、多民族及び多文化の共生という考え方に基づいた教育を行っている。

2つ目は、郷土の良さを知る教育の観点として、インドネシアのバリ島ウブド村を視察先とした。インドネシアのバリ島は、東南アジア諸国の中でも地域固有の風土と文化に基づいた近代化が進められており、学校教育の中にも伝統文化が取り入れられている。特に、観光地として有名なウブド村の小学校カリキュラムでは、国際観光地バリ島を特徴づける舞踊や絵画、工芸などの伝統文化の授業が行われている。

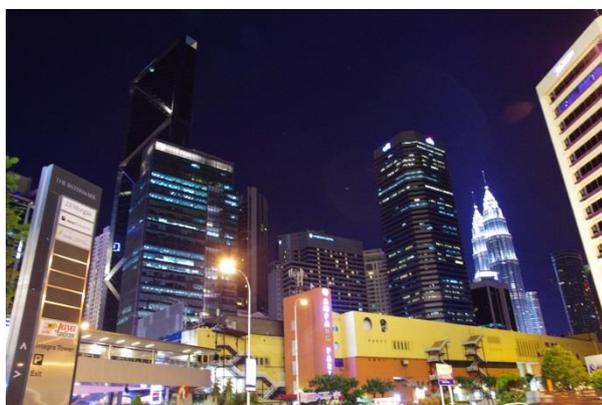
それぞれの視察先を調査した上で、日本の教育のあり方や出向元である狛江市の現状と比較し、地域ならではの特色や文化がいかにか子ども達の郷土愛の醸成に作用しているかを考察していく。

2 マレーシア クアラルンプール市内小学校の教育

(1) クアラルンプール市の概要

マレーシアは東南アジアの中心に位置しており、マレー半島とボルネオ島の一部・サバ州とサラワク州から成り立っている。人口約3,000万人のマレーシアは、マレー系、中国系、インド系、そして多数の民族に分けられる先住民族で構成される多民族国家である。宗教も国教であるイスラム教のほか、仏教、ヒンズー教など多岐にわたり、使われている言語もマレー語、中国語、タミール語、英語など様々だが、民族対立や宗教対立が先鋭化したことはなく、安定した社会を築いてきた。現首相が掲げるスローガンの一つに「1 (ワン) Malaysia」というものがあるが、文字通り様々な民族が一つのマレーシアになること

が社会そして経済を発展させていく原動力となっており、加えて、それぞれの民族が持つ宗教、生活習慣の融合は独特な文化を生み出し、マレーシアの魅力を創り出している。



▲クアラルンプール市の都会的な様子

マレーシアの首都は、地元の人々には「KL (ケーエル)」の愛称で親しまれるクアラルンプールである。「泥川の交わる場所」という意味のマレー語を語源に持ち、1800年代に錫鉱山の発見と共に発展した。主要産業は小売業、金融業、サービス業の第3次産業であり、マレーシアの金融・ビジネス拠点となっている。クアラルンプール市の構想「クアラルンプールーワールドクラス・シティ」は、2020年までの先進国入りを目指した「ビジョン (Wawasan) 2020」という国家目標と一致しており、労働環境、住環境、ビジネス環境、統治の4つの要素において、世界レベルと地域レベルの主要な役割を担う都市となることを目指している。

(2) 小学校の取組

視察日：2016年9月21日(水) 9:30～11:30

視察場所：Sekolah Kebangsaan Seksyen 1 Bandar Kinrara Puchong

今回視察した小学校は、クアラルンプール市内の2001年2月1日に設立された公立小学校である。

この小学校にはリソースセンターや科学室、カウンセリングルーム、トリートメントルーム、そして2つのコンピューターラボなどの設備が整っている。現在の生徒数は、幼稚園の生徒を加えて約2,000人となっており、マレー系のほか、中国系、インド系など、多民族国家ならではの様々な人種で成り立っている。



▲学校の外観

	マレー系	中国系	インド系	その他	幼稚園
人数	1712人	22人	155人	35人	203人
	合計			1924人	2127人

教員の体制は、校長の下に4人の副校長（シニアアシスタント）が付き、その他の教員のバックアップを行う形をとっている。教員もマレー系、中国系、インド系など多民族となっており、全部で120人が勤務している。日本とは異なり、一人の教員が教科別に専門分野を教えている。科目は、国語（マレー語、英語+母国語）、算数、科学、宗教、道徳となっており、算数と科学は学ぶ言語をマレー語か英語か選択することができる。



▲校内の様子

・学校のルール

マレーシアの学校教育の基本的な理念は、マレーシアの国是である「ルクヌガラ（RUKUNEGARA）」に集約されている。これは1969年の人種（民族）暴動の翌年にマレーシア国家の統一と発展を目指した国造りの指針として作成された国家理念である。

「RUKUNEGARA」

我々マレーシア国民は以下の5つの目的の達成を目指す。

- ①複合社会の統一された国家
- ②法的に選ばれた国会による民主社会
- ③すべての者に平等な機会がある自由社会
- ④多様な文化的伝統を持つ自由な社会
- ⑤科学と現代技術を志向する進歩的な社会

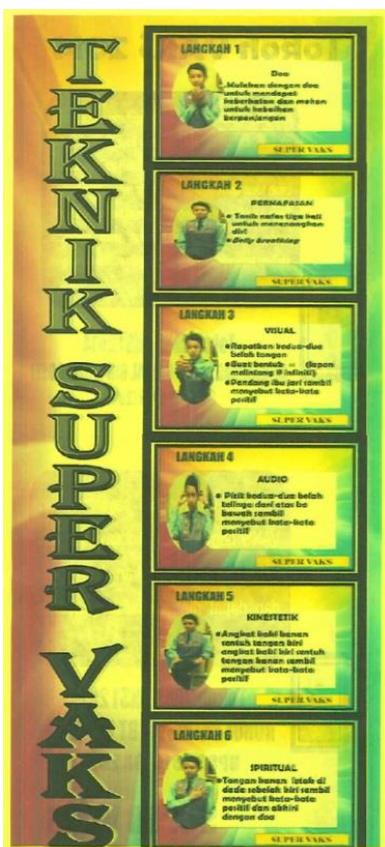
これらの目的の達成は次の原理原則によって導かれる。

- ①神への信仰
- ②国王と国家への忠誠
- ③憲法の擁護
- ④法の支配
- ⑤良識ある行動と道徳

これらを順守することは当然であり、その上で、この小学校では以下の学校誓約を定めている。

「IKRAR SEKOLAH」

- ①神に従うこと
- ②親に従うこと
- ③教師に従うこと
- ④様々な活動に参加して知識を増やすこと
- ⑤一生懸命勉強すること
- ⑥将来は社会に出て、国のために働くこと
- ⑦学校を清潔に保つこと



▲SUPER VAKS の動作手順

・多民族ならではの特色

前述のルールを守りつつ、この小学校ではマレーシアという国ならではの特色ある活動が行われている。

この学校には、文部科学省主催の全国カウンセリングサービス・ベストプラクティス 2015 にて優勝した「スーパーボックス (SUPER VAKS)」という取組がある。毎朝授業の前に体操とお祈りを行うもので、これによって勉強に必要な集中力を上げることができている。現に、こちらの小学校は周囲にある4つの小学校と比較して、小学校6年生時に学力到達度を測るために実施される統一国家試験の成績が優秀であり、入学希望者が最も多い小学校となっている。

体操の最後に行うお祈りは、各宗教それぞれの方法になっており、多民族小学校の特色が表れていると感じた。この学校では生徒同士がお互いの宗教を尊敬できるように教育が進められているが、特に、スポーツによって団結を図る方法は効果があるという。これにより、宗教が異なっても学校の大多数を占める3大民族(マレー系、中国系、インド系)は諍いもなく上手くやっているということだった。



▲SUPER VAKS の様子



▲SUPER VAKS 最後のお祈りの様子

宗教だけでなく、それぞれの民族のお祭りも共有されている。例えば、チャイニーズニューイヤー（旧正月）やラマダン（一ヶ月ほど断食するイスラム教徒の義務の一つ）など、民族や宗教によって行事の日などは異なるが、そのすべてが学校休業日となる。中でも、マレー系の人々にとって一年で最もおめでたい日の一つであるハリラヤ（断食が終わったあとの祝いの日）には、マレー系の子どもが中国系、インド系の子どもを家に誘って一緒にお祝いしているという。年末には文化の日（子どもの日）があり、その日にはそれぞれの民族の文化を教える時間となっている。民族衣装を着て伝統舞踊を踊るなど、パフォーマンスを行うことによってお互いの文化の理解を深めている。



▲校内に貼られたポスター

・地域との関わり

イベント日などには地域の人が学校へ来てスピーチを行い、生徒へ知識を提供している。しかしながら、クアラルンプール市には伝統的な文化や地域特産品がないため、日本の総合学習の時間のように、地域のことを調べるといった授業は行われていない。グローバルな人材を育てることと、多民族社会で生きていくための語学力を重視しており、語学を専門・中心に教えられている。

（3）多民族・多文化ならではの教育のあり方

先述したとおり、クアラルンプール市には特徴的な文化や地域資源がなく、そういった環境では地域への愛着がわきにくいと考えられる。しかしながら、兄弟姉妹が多い大家族がほとんどであるクアラルンプールでは、就職などで外へ出て長期休暇には皆ふるさとへ帰ってくるということだった。それは、クアラルンプール市の地域らしさを作り上げているものが、その地域の歴史・文化、産業といった地域資源ではなく、そこに住む人々の繋がりとそれが生み出す安心感によるものだからではないだろうか。Bandar Kinrara Puchong 公立小学校の校長からは、マレーシアという国自体で混乱がないのは多様性を認め合える教育が行われているおかげとの言葉もあり、多民族・多文化の社会で育った人々は自分とは異なる文化や考えを受け入れやすく、それが人と人との結びつきを濃いものに

しているのだと感じられた。



▲視察先の校長と先生方と

3 インドネシア共和国 バリ島 ウブド郡ウブド村内小学校の教育

(1) ウブド村の概要

インドネシア共和国は東南アジア南部に位置する世界最多の島嶼国家であり、主要な 5 島と中規模な群島を含めた約 17,000 以上の島々から成り立っている。人口約 2 億 5,000 万人のインドネシアは、ジャワ人、スンダ人など大多数がマレー系で、その他は中国系やパプア系の民族などが居住しており、約 490 の民族集団がそれぞれの多様な民族文化を継承してきた。宗教はイスラム教が 90%を占めており、公用語はインドネシア語だが、国内各地ではジャワ語やバリ語など、独自の言葉も使われている。



▲ウブド村中心部にある遺跡

バリ島は、インドネシア共和国バリ州に属する島であり、地理的にはインドネシアのほぼ中心に位置している。島の人口は約 420 万人で、そのうち 95%の人々は敬虔なヒンドゥー教徒のバリ人が占めており、インドネシアで唯一のヒンドゥー教の島となっている。バリ・ヒンドゥー教は、インドからの影響を受けながら元来バリにあった自然信仰が長い間

に融合したものとされており、プラ（ヒンドゥー教の神を祭った寺院）で行われる儀式や祭り、踊り等は、島民の重要な年中行事であり島の観光要素の一部となっている。中でもウブド村は、ガムラン音楽、バリ舞踊、バリ絵画などが盛んな芸術の村として知られ海外の観光客から人気を集めている。

（２）小学校の取組

視察日：2016年9月24日（土）9:30～10:30

視察場所：Sekolah Dasar Negeri 3 Ubud

今回視察した小学校は、ウブド村内の1976年4月1日に設立された国立小学校である。

ウブド村の小学校は全部で5校あり、設立の順に番号がついている。教室は13教室に分かれており、現在の生徒数は363人で1番多いのは2年生の3クラス73人となっている。

教員は最低9人（校長、担任6人、専門2人）が必要とされており、この小学校では20人が勤務していて、そのほとんどがこの地域の住民となっている。科目は、インドネシア語、数学、体育、宗教、英語、Extra（カリキュラム外の授業）、科学、物理学、文化（踊り・音楽）となっており、インドネシア語、英語、宗教、体育以外は全て一人の教員が教えている。教員の負担が大きいため、学校によっては教員を分けたりしている。授業内容は、インドネシア語、数学、科学、物理学、宗教の5つの科目を国が定めているが、宗教は州政府によってやり方が変わり場所によってはイスラム教を教える学校もある。基本的には、ヒンドゥー教以外の生徒は他の学校の生徒と集められ、別の場所で教えられている。



▲学校の正門

教員は最低9人（校長、担任6人、専門2人）が必要とされており、この小学校では20人が勤務していて、そのほとんどがこの地域の住民となっている。科目は、インドネシア語、数学、体育、宗教、英語、Extra（カリキュラム外の授業）、科学、物理学、文化（踊り・音楽）となっており、インドネシア語、英語、宗教、体育以外は全て一人の教員が教えている。教員の負担が大きいため、学校によっては教員を分けたりしている。授業内容は、インドネシア語、数学、科学、物理学、宗教の5つの科目を国が定めているが、宗教は州政府によってやり方が変わり場所によってはイスラム教を教える学校もある。基本的には、ヒンドゥー教以外の生徒は他の学校の生徒と集められ、別の場所で教えられている。

・学校のルール

インドネシアの学校教育の基本的な理念は、インドネシアの国是である「パンチャシラ（Pancasila）」に集約されている。これは1945年のインドネシア共和国独立の時に制定した憲法の前文に規定されている国家理念である。

「Pancasila」

- ①唯一神への信仰
- ②公平で文化的な人道主義
- ③インドネシアの統一
- ④協議と代議制において英知によって導かれる民主主義
- ⑤インドネシア全人民に対する社会主義

※①に唯一神への信仰とはあるが、イスラム教を国教としてではなく、キリスト教（カトリック、プロテスタント）、ヒンドゥー教、仏教は容認されている。

・観光地ならではの特色

前述のルールを守りつつ、この小学校ではウブド村ならではの特色ある活動が行われている。

インドネシアの小学校教育にはExtraという授業があり、その内容は学校によって決めることができる。Extraには学校が良い教員を見つけてくる責任を持っており、基本的に生徒たちの趣味や要望にあわせて決められている。ウブド村ではバリ島の伝統的な踊りと音楽が盛んで



▲Extraの様子

あり、この小学校でも行われている。特に、ガムラン伴奏と女性舞踊による伝統舞踊「レゴン」という歓迎の踊りは、小さい頃から練習しないと上達が難しく、将来ウブド村で働くことを考えると早めに身に付けておくことが望ましいとされており、こうした点からもExtraに舞踊が取り入れられるのは当然と考えられる。

さらに、Extraで学んだ踊りを活かし、ウブド村の小学生は踊り子としてアルバイトが出来るようになってきている。海外から踊りに来てほしいと招待されることや、ウブド村の中心にあるプリルキサン美術館の日曜日のショーで踊ることもあり、小学生の頃から地域の伝統文化が生活の一部として存在していることが伺える。このように早いうちから観光客へ踊りを披露したりチップをもらったりすることで、子ども達が伝統舞踊を学ぶモチベーションの向上へも繋がっている。



▲プリルキサン美術館

また、ウブド村は観光客が多く来ることから村の歳入が多く、そのおかげで学校の予算も多く組まれているため、Extraの授業以外にも毎日曜日に特別授業が実施される。特別授業には舞踊の専門家を中心に外部から様々な講師が呼ばれ、より自分の村を愛するための授業が行われている。

・地域との関わり

地域との関係を良好なものとするため、学校周辺の掃除は生徒や教員がほとんど毎日行っており、さらにはウブド村の中広場の掃除も実施している。また、独立記念日までの期間には様々なイベントが開催されるため、その期間は特に重点的に掃除を行い、地域の中の学校として気を配っている。

(3) 伝統文化を取り入れた教育のあり方

ウブド村は国際的な観光地であることから、地域の伝統文化が生活に密接に関係しており、その特色にあった授業が行われている。それは、外の人間に対して自分の村がどんな

場所であるかを伝えるための勉強であり、そうした授業を受けることによって、子ども達はより自分の村の良さを知っていくことになる。その結果、ウブド村の子ども達は自分のまちを愛する気持ちが非常に強いということだった。

一方で、バリ島内の観光地ではない地域は農業が主な産業であり、そうした地域の学校ではExtraで踊りや音楽を教えることはなく英語中心の授業が行われている。それは、親が自分の子どもには農業中心の田舎ではなく都会へ出てほしいと望んでいることの表れである。今回の話からは、郷土愛を醸成する教育には、ウブド村のような生活に密着した郷土文化の存在がいかに大きな影響を及ぼすかを感じることができた。



▲視察先の先生方と

4 日本における地域を学ぶ教育

(1) 日本の教育

日本の小学校では、教育の中で伝統や文化といった地域の特色を伝えることによって郷土愛を醸成し、日本を愛する気持ちを育てるよう、地域を学ぶための学習内容が文部科学省の現行学習指導要領によって定められている。

小学校低学年では、生活科の授業の中で学校周辺を探検したり、地域のお年寄りとの交流を始めたりすることによって、自分と身近な人々や地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心を持ち、地域のよさに気づき、愛着をもつことができるようにすることを目指した内容となっている。

小学校中学年では、社会科の授業の中で東西南北を習った上で市の地域的な特徴を調べ、地域の産業や消費生活の様子、良好な生活環境や安全を守るための諸活動について理解できるようになっている。これによって、地域社会の一員としての自覚を持つとともに、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようになっていることを目指している。

小学校高学年の社会科の授業では、日本全国のことへと広がり、産業、農業、漁業を調べ、気候や文化の違いなどを学ぶ。さらには、日本と比較しながら世界のことを学んでい

く。

加えて、小学校中学年から行われる総合的な学習の時間の中では、学校の実態に応じて、例えば国際理解、情報、環境、福祉と健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動を行ったり、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動を行ったりする。以前は、地域の特産品を調べて模造紙で発表したり、自分の住む地域が良くなるためにはどうしたら良いかをテーマに劇を作ったりと、地域を大切に、地域を知っておこうという目的で行われることが多かったが、最近では地域をテーマに選ぶことは縮小傾向にあり、福祉をテーマに選ぶ学校が増えている。また、キャリア教育に力を入れて職業人を呼んでくるような学習活動も多くなっている。

（２）狛江市の取組

地域を学ぶための学習内容の一環として、狛江市では市の文化施策の柱の一つである絵手紙を子ども達に広めるため、絵手紙教室を実施している。小学校と中学校においてそれぞれ1回ずつ絵手紙教室を実施しており、海外調査研究事業に行くにあたり、小学校で行われた絵手紙教室を視察してきた。

視察日：2016年9月2日（月）10:40～12:15 総合的な学習の時間

視察場所：狛江市立狛江第五小学校

対象学年：小学校3年生

実施団体：「絵手紙発祥の地ー狛江」実行委員会

テーマ：親や祖父母、教員など、絵手紙を送りたい人とメッセージを事前に考えてきて、教室当日に季節の野菜や果物を持ち寄り、絵手紙に描いて気持ちを伝える。

実習内容：講師がお手本を見せた後、筆の持ち方から墨の付け方、線・丸の引き方を練習し、最後に持参した野菜や果物を見ながら、思い思いに絵とメッセージを描いていく。

実習後：廊下に絵手紙を掲示し、父母に見てもらおう。



▲子ども達が描いた絵手紙

狛江市では2007年より、「絵手紙発祥の地ー狛江」として様々な事業を実施している。これは、1981年に市内に住む絵手紙創始者である小池邦夫氏を講師に招いて、狛江郵便局内で日本初の“絵手紙教室”を開いたことから取組んでいるものである。「絵手紙」とは、絵のある手紙を送ることだが決まった形式はなく、「ヘタでいい ヘタがいい」「ぶっつけ本番」「お手本なし」という3つの心得があるだけで、誰でも気軽に描くことができるものとして日本全国で親しまれている。

絵手紙教室の冒頭では、こうした絵手紙発祥の地の由来について説明が行われた。実行委員によると、市内に絵手紙が掲示されていたりするためか、すでに絵手紙がどういうものかや、狛江市が絵手紙発祥の地であると何となく知っている子どもは多いという。そうした中で絵手紙教室を実施することによって、例えば、地域のことを調べる授業では調査テーマとして絵手紙を選ぶ子どもが多くいたり、別のテーマを選んだ子ども達でも、調査に行った市内の業者等へお礼状として絵手紙を送ってくれたりする。そのような子ども達を見ていると、絵手紙教室によって狛江市への愛着は育てられていると感じられるということだった。

5 3 カ国の小学校教育を比較して

3 カ国の小学校教育を比較してみると、その土地ならではの教育のあり方がそれぞれの郷土愛の醸成に影響を与えているとわかった。狛江市でも郷土愛を育む教育は行われているが、今回の調査で得られた2地域の教育の観点は狛江市には欠けているものであり、今後どのように活かしていくことができるか考察した。

まず、クアラルンプール市の多様性を認め合える教育の観点からは、次のように考える。日本全国の外国人人口は増加しており、現在横ばいの狛江市の外国人人口も今後増えていく可能性は高い。そのため、狛江市の教育においても他の民族の文化や宗教を知る機会を設けていくことが望ましく、クアラルンプール市の小学校のように、同じ小学校へ在籍する外国人児童の民族的な行事の日を一緒に祝うことは重要と考える。ただ、そうした国際的な違いを共有するだけではなく、自分や家族の出身地の特徴的な文化について話すなど日本各地域の違いも楽しめるような工夫を加えることで、より多様性を認め合える教育を行うことができるのではないだろうか。こうした教育は、外国人との関係性に対してだけではなく、自分と異質なものを排除しようとすることから引き起こされるいじめのような事例に対しても効果を発揮し、さらには地域全体へ連帯感を生み出すとともに包容力のある地域へと変化することにも繋がり、そのことによって外部の人間も魅力的と思う地域になることができると考える。

次に、ウブド村の郷土の良さを知る教育の観点からは、生活に密着した地域固有の文化を学ぶ機会が重要と考える。前述の絵手紙教室のように、狛江市の特色や文化を知る機会が設けられており、郷土愛の醸成に対してもある程度の効果は出ているが、この取組には自治体として他自治体との競争に打ち勝とうとする意図も感じられる。純粹にその地域への愛着を育むには、地域ブランドとして価値のある特産品や文化を学ぶだけではなく、生活の一部となっている土地の成り立ちや市の歴史を学ぶ機会を設けることが望ましいのではないだろうか。例えば、狛江市の南部に流れている多摩川の自然や景色がどう作られたのかということや、狛江百塚と呼ばれるほど多く存在する古墳の成り立ちと併せて狛江や日本の歴史を学ぶなど、この土地ならではの体験や情報を得る機会が必要だろう。生活に密着した地域文化を学ぶ教育は、その地域への愛着を自然に育て、狛江市を離れた後も地元と繋がりを持ちたい、協力をしたいという気持ちを醸成することへ繋がっていくと考え

る。

一方で、日本の小学校ならではの課題もある。狛江市の小学校教諭は東京都教育委員会の採用であり、都内の小学校を異動していくため、狛江市に住んでいない人や、そもそも縁もゆかりもない人が多い。そのため、総合的な学習の時間で地域を学ばせていても、郷土愛を醸成しよう、地域に根差した人を作ろうと思って授業を行っているわけではない。また戦争教育の歴史を想起させるような愛国教育は学校では避けられている。そういった面を考えると、教員が授業の中で教えることに加えて、地域住民が関わって教えていくということは非常に重要だと感じる。それによって、より純粋に地域の良さを感じとり、地域の住民との関係を構築していくことができるだろう。

以上のように、2つの観点に基づいた教育のあり方とともに、学校だけではなく地域も一丸となって子ども達を育てていくことが、郷土愛を育むためには重要なことと感じた。

【参考文献・資料】

- 三木 敏夫、『マレーシア新時代－高所得国入り－』、創成社、2011年8月
- 財団法人自治体国際化協会（シンガポール事務所）、『マレーシアの教育』、CLAIR REPORT NUMBER 217、2001年6月
- 外務省ホームページ、『諸外国・地域の学校情報 インドネシア』、<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC10200.html>、最終閲覧2016年10月
- 外務省ホームページ、『報告書・資料 第2章 特定テーマ評価 教育・人材開発（インドネシア）』、<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/h11gai/h11gai017.html>>、最終閲覧2016年10月
- 中岡 義介／川西 光子／I. G. P. Wirawan／Son Jang Ho、『インドネシア・バリ島における学校の発生と展開、構造に関する研究（1） 国際観光地ウブドゥ村における小学校教育の実態調査－カリキュラムを中心に－』、兵庫教育大学 研究紀要 第33巻、2008年9月
- 文部科学省ホームページ、『現行学習指導要領・生きる力』、<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm>、最終閲覧2016年10月